

聖書：士師記 9：1～57

説教題：まことと真心をもって

日時：2014年5月25日

8章でギデオンの残念な姿を私たちは見ました。臆病で小心者だったギデオンが主の力によってミデヤン人に勝利した後、理想的な状態から落ちて行ってしまいました。彼は勝手に金のエポデを作り、それを自分の町オフラに置いたため、人々はそれを慕って偶像礼拝をするようになりました。またギデオンは、私はあなたがたを治める王ではないと口で言いつつ、実際には多くの妻を持って王のような生活を送りました。そしてシェケムにいたそばめとの間に子をもうけ、その子に「私の父は王」という意味のアビメレクという名をつけました。そのアビメレクがこの9章で大変な事件を起こします。彼は主によって立てられたさばきつかさではありません。彼は自ら画策して王の立場に着き、一層の混乱と不幸をイスラエルにもたらすのです。

アビメレクはシェケムの身内の者たちのところに行き、このように言います。2節：「どうかシェケムのすべての者に、よく言って聞かせてください。エルバアルの息子70人がみなで、あなたがたを治めるのと、ただひとりがあなたがたを治めるのと、あなたがたにとって、どちらがよいか。私があるがたの骨肉であることを思い起こしてください。」ギデオンには70人の息子たちがいましたが、その彼らが支配権を持つのと、シェケム出身の私が支配権を持つのでは、どっちが良いかと問うています。そして彼はバアル・ペリテの宮から銀70シェケルを取り出して、ごろつきの凶々しい者たちを雇い、オフラに住むギデオンの子ら70人を一つの石の上で皆殺しにします。末子ヨタムは隠れていたのので逃れましたが、ライバルをほとんど消し去ったアビメレクはシェケムに戻って来て王となります。ほとんど無法地帯のような有様です。

これを知ってギデオンの末子ヨタムはゲリジム山の頂上に立ち、シェケムの者たちにメッセージを語ります。彼はまずたとえを語ります。木々が自分たちの王になってくれるようにとオリーブに、次にいちじくに、次にぶどうの木をお願いします。ところがこれらはいずれも、その願いを退けます。それに対して最後にいばらがこれを受け入れます。いばらは言います。15節：「すると、いばらは木々に言った。『もしあなたがたがまことをもって私に油をそそぎ、あなたがたの王とするなら、来て、私の陰に身を避けよ。そうでなければ、いばらから火が出て、レバノンの杉の木を焼き尽くそう。』」このいばらとはアビメレクのことです。彼は王にふさわしくない、野心に満ちた危険な存在であるとヨタムは警告します。そしてこれはあなたがたに善意を尽くしたギデオンに真実を尽くしたものだろうか、と問います。もしそうでないなら、あなたがたに必ず報いもたらされると宣言します。20節の「そうでなかったなら、アビメレクから火が出て、シェケムとベテ・ミロの者たちを食い尽くし、シェケムとベテ・ミロの者たちから火が出て、アビメレクを食い尽くそう。」という言葉は注目に値します。アビメレクとシェケムは今悪い考えで一致しているが、その関係は決して長続きしない。あなたがたはやがて互いに食い合い、滅ぼし合って、さばきをもたらし合うようになる。これを聞いたアビメレクやシェケムの町の者たちは、そんなことはないかと笑っていたかもしれませんが。そして3年間はこの状態が保たれたようです。しかし時が経過して、このヨタムの宣言は現実のもの

なっていくのを私たちは残る章の中で見るのです。

まずシェケムの人々がアビメレクを裏切り始めます。これは神がアビメレクとシェケムの者たちの間にわざわいの霊を送ったから、と 23 節にあります。この結果、シェケムの人たちは山々の頂上に待ち伏せる者を置き、通り過ぎる者すべてを略奪し始めます。これはシェケムの治安を悪くすることによってアビメレクの支配を揺るがそうとしたものか、あるいはアビメレク自身を襲おうとしたものか、良く分かりません。いずれにしろ、こうしてアビメレクとシェケムとの間には分裂が生じます。ヨタムの言葉で言えば、シェケムから火が出たのです。

26 節以降では、そのシェケムにさらにガアルが加わります。28 節から分かることは、彼はシェケムの父ハモルと深いつながりがある人であるということです。ハモルという名で思い起こすのは、あの創世記 34 章のディナの凌辱事件です。もともとここにはヒビ人ハモルとその子シェケムらが住んでいましたが、シェケムがディナを見てこれを捕らえ、これと寝てはずかしめる事件が起こったため、ヤコブの息子たちは一つの民となる約束を交わし、相手方に割礼を受けさせます。そしてその傷が痛んでいる間に襲って、すべての男子を殺したことがありました。しかしそのシェケムの父ハモルの血を引く者たちがこの町には残っていたのでしょうか。ガアルもその一人だったと考えられます。その彼がシェケムのより深い伝統に訴えたのです。先にアビメレクが自分はシェケム出身であると訴えて、シェケムの人々の心を勝ち取りましたが、今度はガアルがこの町のより深い歴史に訴えて、アビメレクに対する謀反を煽ったのです。こうしてアビメレクは自分がしたように他の人にもされることとなったのです。

ガアルの謀反を知ったアビメレクは、夜の内に体制を整え、翌朝、一気にガアルと彼に付く者たちを襲います。ガアルは思わぬタイミングで戦わなければならなくなり、あっけなく敗退します。アビメレクの怒りはこれで収まりません。彼は次いで反乱を企てたシェケムを滅ぼしにかかります。43～45 節にあるように、彼は出て行ってすべての者を襲って打ち殺し、この町を破壊します。さらに 46～49 節にあるように、エル・ベリテの宮の地下室に逃げ込んだ者たちを滅ぼすため、この地下室に火をつけて一千人を皆殺しにします。まさにヨタムが預言したように、アビメレクから火が出て、シェケムの者たちを食い尽くした。

アビメレクはさらにテベツの町も同じようにしようとしました。このテベツはおそらくシェケムと関わりが深い町だったのでしょう。ところが、でした。その時、ひとりの女が上から投げつけたひき白の上石が、彼に命中して、その頭蓋骨を砕いてしまいます。これによってアビメレクはあっけなく最期を迎えることになります。彼は女に殺されたという不名誉な話が伝わらないようにしてくれと嘆きつつ、その生涯を閉じます。ここにも皮肉があります。アビメレクはギデオンの子らをも一つの石の上で殺しましたが、その彼自身、石を投げつけられ、石の傍らで死にます。自分がしたようにされたのです。こうして 9 章は最後をこのようにまとめています。56 節と 57 節：「こうして神は、アビメレクが彼の兄弟 70 人を殺して、その父に行なった悪を、彼に報いられた。神はシェケムの人々のすべての悪を彼らの頭上に報いられた。こうしてエルバアルの子ヨタムののろいが彼らに実現した。」

以上の士師記 9 章は、私たちにどんなメッセージを語っているのでしょうか。まず大きな視点で見ると、この 9 章はやはり前の章のギデオンの罪との関係で見られるべき章ではないでしょうか。アビメレクはギデオンがシェケムにいたそばめとの間にもうけた子どもでした。そこか

らこの災いが生じました。しかもアビメレクという名は、先に見た通り、「私の父は王」という意味で、ギデオンが正しい道から外れたことを示す名でもありました。そこからこのような悪が吹き出た。改めて思わされることは、罪がもたらす影響は大きいということです。それは自分の世代だけで終わらない。それは次の世代にも思わぬ形で禍根を残す。自分の家族の将来に、共同体の将来に、国の将来に。ですから私たちは急いで自らを点検しなくてはならないと思わされます。私のいい加減な、気を許した歩みが、次世代にあるいはさらにその後の世代に悪い実りをもたらすことがないように。将来猛威をふるう悪の種を蒔くことがないように。むしろ祝福の種こそを蒔くように自らの歩みに気をつける者でなければ、と。

しかしながらこのことはアビメレクが単にギデオンの被害者だということにはなりません。彼の悪はやはり彼の悪として責められなければなりません。この9章にはつきり示されていることは、悪がさばかれないまま終わることはないということです。9章最後の二つの節を見るまでは、ここにあったのは悪が幅を利かせ、正義のかけらも見られないような暗黒の世界でした。私たちがこの時代に生きていたら、なぜ神は沈黙しておられて、アビメレクがしたい放題するのを許されるのかと思ったでしょう。しかし最後の二つの節が語っていることは、悪には必ずさばきがあるということ。そう見えない時があっても神の支配はそこにあるのであり、時至って神は一人一人に必ずふさわしい報いをお与えになる。仮にこの世でそうでなければ、来たるべきさばきにおいて必ずそれは実現する、と。

私たちの目に良く見えなくても、神のさばきのみわざは確かに進行していることを、ある人は次のようなたとえで説明しています。ある人が家の庭のバスケットボールのゴールの板に、毎日ボールをぶつけながらシュートの練習をしていました。数ヶ月後、同じようにシュートした瞬間、その板は突然ボロボロに割れてしまった。それはとてもひどい壊れ方であった。実は野外で雨や風に吹きさらしにされてボールをぶつけられている内に、それはだんだんと腐食し、内部は弱くなっていたわけです。それがある日、突然割れるという形で明らかになった。同じように神の働きは、私たちの目に良く分からない形ですでに進行中ということがある。ですから私たちは自分は少々不正に生きているが、今のところ何も起きていないから大丈夫と高慢になったり、あるいは正しく歩んでいない人を見て、さばく主の御手が良く見えないからと言って苛立ってはならない。神の支配の御手はあらゆる事柄の上であり、最後のさばきに向かって動いています。そのことを思って私たちは心ゆり動かされることなく、自らは正しい生き方をする事へと励まされるべきではないでしょうか。

私たちはより積極的にはどう生きたら良いのでしょうか。この章からその勧めを見出すとすれば、それはゲリジム山頂からヨタムが語ったメッセージ、「まことと真心をもって」になるでしょう。ヨタムはアビメレクとシェケムの町に対し、あなたがたはあなたがたのためにギデオンが戦い、命をかけて、助け出してくれたことを心に留めていないと批判しました。そしてそれはまさにこの時のイスラエルの状況であったことを今日の章直前の8章34～35節はこう述べていました。「イスラエル人は、周囲のすべての敵から自分たちを救い出した彼らの神、主を心に留めなかった。彼らはエルバアルすなわちギデオンがイスラエルに尽くした善意のすべてにふさわしい真実を、彼の家族に尽くさなかった。」ギデオンは確かに善悪両面が混じっている士師でした。しかしそれでも彼は主がイスラエルのために立ててくださった救助者でした。

この救助者と、この救助者を送ってくださった主に対する忘恩から、この章で見たすべての悪が出て来たと言えます。このことを思う時に思わされることは、私たちはギデオンにはるかに勝る完全な救い主を頂いているということです。それゆえにそこから問われることは、果たして私たちはその完全な救い主に心から感謝し、またこの方を送ってくださった父なる神を心に留めて、ふさわしい真実をお返しする歩みをささげているかということです。もしこのことを心に留めないなら、私たちも今日の章に出て来た人たちのように、自分勝手な道に進む者となってしまいます。この士師記 9 章に描かれているのは、一言で言って、主の恵みを心に留めないで歩む者の悲惨です。私たちは同じ歩みをしないために、まことの士師が私たちのために何をしてくださったのかをいつも心に留めたいと思います。この方が私たちのために戦い、自分の命をかけて、私たちを助け出してくださったことを常に心に刻みつける者でありたい(17 節参照)。またこの救い主を送ってくださった父なる神をいつも心にしっかり留める者でありたい。そうすることによって、この 9 章で見たような悪の歩みから守られ、むしろ喜びと感謝、まことと真心をもって主に応答し、主に喜ばれる生活をささげる祝福の歩みへ導かれたいと思います。